

# プラーガー・プレッセ紙の時代のローベルト・ムージル 小説『トンカ』へのノヴァーリスの影響について

長谷川 淳 基\*

Robert Musil in der Zeit der Prager Presse  
—Zum Einfluss von Novalis auf die Novelle „Tonka“—

Junki HASEGAWA

## I. はじめに

ムージルは1922年に小説『トンカ』を発表した。この小説の主人公の青年は、作品の中でノヴァーリスの『日記』を読んでいる。より正確に言うならば彼はこの本を机の上に開いたままにしている。この青年には本を読み進める暇がないのか、もしくは何かの事情があってこの本を読むための意欲が減退しているのだろうか。全く意欲が消えているのなら本を閉じて、書棚に戻せばよいだけのことだから、本への関心がいまだ少しは残っているということなのだろうか。

そもそもこのノヴァーリスの『日記』とはどのような本なのだろう。そこには何が書かれているのか。ムージルはなぜわざわざノヴァーリスの『日記』を小説『トンカ』の中に持ち込んだのだろうか。本論はムージルの小説『トンカ』とノヴァーリスの『日記』についてこうした疑問点を中心に考察し、併せて作家ムージルの1920年代初頭の姿を描くことを目的とする。

## II. モチーフの共通性

### 1. ムージルの『トンカ』

小説『トンカ』の主人公は、化学の研究を志す青年である。この家には老いた祖母がいる。その世話のために若い娘が雇い入れられる。トンカである。青年とトンカはぎこちなく心を通わせ合う。程なくして祖母は亡くなり、用済みになったトンカはわずかなお金を持たされて—いや、青年の母はさらに「数枚のハンカチや、シュミーズやズロース」と「まだ新しい黒地のワンピース」を上乘せするのであるが—解雇されることとなる。青年の伯父がトンカに解雇にまつわる委細について言い含めている傍らで、青年は本を読むふりをしながら聞き耳を立てている。「彼はその場に居あわせた。彼は本を読むようなふりをしていた—それはあい変わらずノヴァーリスの日記断片だった—」<sup>1)</sup>。解雇されたあとトンカは彼女の伯母の元へ戻るようになっていた。が、数日間はおも屋敷に残ることが許された。トンカの哀れな境遇に同情した青年は「きみを伯母さんのところへは帰らせないよ。きっと何か仕事はある。僕が

\*人間関係学科 教授

一面倒をみよう」と後先も考えずに言ってしまう。動揺を抑えながら部屋に戻った青年の机の上には、例のノヴァーリスの『日記』が置かれたままになっている。そうこうする中で青年は無事学位を得る。彼は両親を避けるためにトンカと、ある大都会へ出る。彼女のわずかな収入だけが二人の生活を支える。トンカが身ごもる。青年はトンカの不義を疑う。トンカは性病をも罹患しており、病は重篤化する。処女懐胎は可能なのかなどと青年は思い惑う。そしてトンカは死ぬ。永遠の時間の流れの中で、トンカは夏に舞い降りた雪のひとひらだったとの思いを青年はいただき、小説は終わる。

ムージル作品集の編者フリゼーならびに研究者アルンツェンの指摘によると小説『トンカ』の構想は遠く1903年に遡る。以来、折に触れて取り上げられ第1次大戦後の1922年に最終的な形をとるに至り、同年末に『デア・ノイエ・ロマーン』第9号で日の目を見ることになった。<sup>2)</sup> 35頁ほどの小説ながら『トンカ』はおよそ20年の歳月を経て誕生したことになる。我々現代の読者は『トンカ』執筆のためのムージルの詳細な草稿やメモも、編集者フリゼーのおかげで簡単に手にとることができる<sup>3)</sup>。小説『特性のない男』を代表作とするムージルは細部にまで徹底的にこだわり精密を旨とする作家であった。この意味では『トンカ』は他の作品に抜きん出て、ムージルの代表作の一つとすることができる。その作品中にノヴァーリスの『日記』が、二度にわたり挙げられているのである。読み飛ばすべきではなかろう。詳細に見てみよう。

一度目は

Er las scheinbar in einem Buch – es waren noch immer die Tagebuchfragmente von Novalis – in Wirklichkeit aber folgte er mit Aufmerksamkeit dem Vorgang (……)<sup>4)</sup>

彼は本を読むようなふりをしていた — それはあい変わらずノヴァーリスの日記断片だった — しかし実は、注意深くことの成行きをながめ (……)

二度目は

Er sah jedoch, als er in sein Zimmer zurückgekehrt war, noch immer die Tagebuchfragmente von Novalis auf dem Tisch liegen (……)<sup>5)</sup>

自分の部屋にもどった時、彼はノヴァーリスの日記断片が、あい変わらずテーブルの上に載っているのを見た (……)

こうして二箇所にもノヴァーリスの『日記』が登場する。「日記断片」とあるのは『日記』は実際のところ14の断片から成っており、ノヴァーリスの『日記』の実態を考えればごく自然な表記である。注目せねばならない点は最初の引用文である。我々読者は青年について何も知らない状態でこの小説を読み始める。化学に携わる若い青年、裕福な家、奉公にやって来た娘、彼女の解雇。そして青年が手にしている本のタイトルが、さりげなく小説中の語り手から我々に告げられる。ノヴァーリスの『日記』がそれである。しかしながら、なぜ「あい変わらず noch immer」なのだろうか。青年はいかなる理由で、いかなる経緯で、そして一体いつからノヴァーリスの『日記』を手にしているのか？少しは読んでいるのだろうか。全く中は覗いていなくて、ただ格好だけ『日記』を手にしているのだろうか？同じ状況が、再度我々に語られる。ここでもまた「あい変わらず」という副詞が添えられている。今度は机の上に置いてある。

ノヴァーリスの『日記』は一読するだけならばおそらく半日もあれば十分である。大いに考えられることは、『日記』は主人公の青年の座右の書であったということである。青年の傍ら

にはいつもノヴァーリスの『日記』があるということを小説の語り手は読者に告げているのである。

## 2. ノヴァーリスの『日記』に書かれていること

ノヴァーリスの『日記』を見てみよう。ノヴァーリスの『日記』はハンザー版<sup>6)</sup>、コールハマー版<sup>7)</sup>ともに60頁ほど、14稿から成り、1から14までの通し番号付きで収録されている。1790年(ノヴァーリス20歳)ヴァイセンフェルスでの記述(通し番号1)から始まっており、旅行記(通し番号4)、「クラリッセ」と題するゾフィーについての記述2ページ(通し番号6)などが日記全体の最初の3分の1にあたり、これらに続いてゾフィー死後の日記となる。すなわち通し番号8の「日記 Journal」と題する日記部分、1797年4月18日から7月6日までの稿が20頁分あり、『日記』全体の核心部分となる。通し番号で9、10、11、12の稿はいずれも量的には小さく、1頁を超えない。通し番号13の稿は1800年4月15日から9月6日の日記であり5頁に及ぶ。すなわちノヴァーリス28歳、死の前年の記述である。最後の14の稿は同年1800年10月8日から同月16日までの日記となる。つまり1800年10月16日が『日記』の最後の日付である<sup>8)</sup>。

通し番号8、1797年4月18日の稿の直前の日記(通し番号7)は同年1797年1月から4月までの、カレンダーへ直接記入した短いメモである。このカレンダーへの書き込みにはゾフィーの死についての記述もある。「3月19日、日曜日。今朝9時半に彼女は死んだ—年齢は15歳と2日—1784(1782)年生まれ」<sup>9)</sup>。そしてこのメモから一週間を経ずして、ほんの3行の先に「1797年4月14日エラスムスの死は聖金曜日だった」と愛する弟の死も記されている。

「自分も二人の後を追って死ぬに違いないという考えが、『決心』や『計画』という言葉になって一貫している。しかし、これがノヴァーリスの自殺の決心でないことは注意しなければならない。ノヴァーリスは後にこの思想の実現には二つの方法、『内面にまなざしを向けること』と『外部への積極的なまなざし』が必要であると述べている。日記の中でも同時にこの二つの方法が実践されているが、次第に力点が前者から後者に移っている点は、ノヴァーリスが二人の死の衝撃を乗り越えたことの表れであると受け取ることもできる」<sup>10)</sup>。彼の「夜の賛歌」とそして『青い花』はもう間近に見えている。

ノヴァーリスの『日記』とムージルの『トンカ』は共に死んだ恋人への思いを綴っている。一方は真正な心情を思うままに記した日記である。他方は小説である。しかしこちらの小説も元をただせばムージルの体験に基づいている。体験という事では、そして死んだ女性二人については何か線引きのような、区別のようなことは考えられない。ムージルいわく、永遠という時間は一滴ずつこぼれるものと考えるならば、人はみな、そして死者はみな同じである。

## III. 考察

小説『トンカ』のモデルがムージル自身の恋人ヘルマ・ディーツであることは、ムージルの日記の書き込みその他を根拠にしていわば常識になっている。1903年には早くもこの小説の構想が記述されているのだが、ヘルマ・ディーツが死んだのは1907年になってからである。1905年5月3日、ムージルは『ハインリヒ・フォン・オプターディンゲン』すなわち『青い花』を読んでいる旨を記している<sup>11)</sup>。ムージルの日記でのノヴァーリスへの言及ということでは、より早い時期から散見されるが他の作家からの孫引きや、不正確な記憶に基づいた記述<sup>12)</sup>も

目に付く。

ムージルはモデルのヘルマ・ディーツが生きているときに、すなわち彼女の死の2年前に『青い花』に関心を寄せ、かつヘルマ・ディーツを作品化しようとの考えを抱き始めている。この点はノヴァーリスと大きく異なる。ノヴァーリスにあつては、ゾフィーの死から『青い花』を手がけるまでの間に空白の時間が全く存在しない一方で、ムージルは『トンカ』の完成までに十年余の時間を要し、その間には第1次大戦への従軍も含めさまざまな人生の体験を経ている。トンカは一度忘れさられた。そう言いうる。

しかし果たしてそうであろうか？

ムージルの『トンカ』を初めて日本語に訳した川村二郎は「『夏の日にひとひら舞い落ちた雪片』にも似た、時間とも無縁な存在に触れる時、彼ら（小説の主人公の男たち-筆者注）は瞬間的に、自分たちの固体としての生存をこえた不可解な力と、わかちがたく結びついているのを感じる。（中略）より強度の凝集力をはらんで、『三人の女』はムシルの搜索の全道程の中に記念すべき里程標をうち立てている」と解説している<sup>13)</sup>。この言葉は多く『トンカ』に向けられていることは引用されている文からしても明らかであろう。『トンカ』には何か痛切なものが感じられるという意味のことを言ったのもやはり川村二郎であったように記憶しているが、まさしくその通りである。このことを敷衍すると、『トンカ』と『青い花』は瓜二つである。

死んだ恋人が作家のミューズとなっている点で、ムージルとノヴァーリスは同一である。ムージルの側からノヴァーリスの心情を考えてみよう。ムージルはヘルマ・ディーツの生前にすでに彼女を作品の中心人物として作品化しようとの考えを抱いている。そして長い年月を経た後にその思いは実現した。さて、ノヴァーリスであるが、彼は恋人ゾフィーが生きているうちに、彼女が死んだら、その後に彼の創作活動を支えるミューズになると考えなかったであろうか？この場合のノヴァーリスの心情を別の言葉で言い換えるならば、恋人ゾフィーの死に備えて何かを思わなかったであろうか、ということである。すなわちゾフィー死後も、ゾフィーと共生する方法を模索しなかったであろうか、ということである。ムージルが書名を挙げている『青い花』の「献詩」はゾフィーの生前にすでにノヴァーリスの脳裏に浮かんでいたのではないだろうか。ゾフィーの病状は深刻で、長い期間にわたった。ノヴァーリスは悲しみ苦しむ時間が十分にあった。ヘルマ・ディーツに対するムージルの状況も同じであった。ムージルはノヴァーリスの作品を通して、彼の心情に自身を重ねながら、ヘルマ・ディーツを主人公にする作品を考えたのかもしれない。

証拠ということではないがこう推測する根拠について一部繰り返しにもなるが述べよう。

ムージルであるが、ヘルマ・ディーツについての記述が1903年に始まること、その記述の一部は1906年に出版される第1作小説『テルレスの惑乱』の同じ草稿原稿に書かれている<sup>14)</sup>ことなどである。

ノヴァーリスについては、先に言及したゾフィー死後の日記の書き込みを見ることにしよう。

4月18日 テンシュテット

復活祭第3日。

朝、官能的気持ちに湧く。彼女と自分のことをあれこれと考える。哲学はかなり明るく軽やかに進捗。目標についての考えはかなりしっかりしていた。—衰弱した感じ—でも拡がりや進歩も感じる。モーリッツの訪問。食事のときとその後、晴れやかな気分で、かなり喋った。ユストが「歌えよ、おお」を歌とツイッターで演奏した。『ヴィルヘル

ム・マイスター』の第4巻のぼくにぴったりの箇所 — マイスターの独白 — が目をひいた (……) <sup>15)</sup>

繰り返すがこの1797年4月18日の日付けはゾフィー死後一月日、31日後の記述である。カレンダーのメモとは異なり日記帳に書かれた文章である。先ず書き出しに驚かされる。そしてノヴァーリスがこのとき27歳の青年であったことをあらためて考えさせられる。「目標」とはノヴァーリスによる後追い自殺の覚悟を言う言葉である。悲しみと絶望の気持ちを抱くこともまた生きていることの証であることを教えられる。絶望と性欲は同居する。ならば長く死の病の床にある恋人の傍らで、この恋人を詩に歌うこと、小説の主人公に仕立てることを考えないであろうか。「マイスターの独白」への言及がある。そのくだりと思われる箇所はこうである。

手紙を書き上げたあと、この仕合せな恍惚状態のなかで、彼は、長いあいだ独り言をつづけ、書いた内容を繰り返し、活動的で立派な未来を思い描いた。多くの高貴な軍人の例は彼をふるい立たせ、シェークスピアの作品は新しい世界を開いてくれた。伯爵夫人の唇からは言い知れぬ炎を吸い取っていた。このすべてが影響をあたえずにはすまないし、またそれを生かしたいと思った。 <sup>16)</sup>

ヴィルヘルムのこの「奇妙で驚くべき」独白のほか、第4巻の内容は演劇論と美しい女騎士アマツォーネの登場、そしてミニヨンと豎琴弾きの2重唱「あこがれを知る者のみが、わが悲しみを知る」の歌である。そして、真剣で誠実な努力についての意義をヴィルヘルムは繰り返し仲間に向かって説く。ノヴァーリスはこの日記の記述で、絶望しつつもすでに未来について考えているのである。

#### IV. むすび

『トンカ』におけるノヴァーリスは、ダンテの『神曲』におけるヴェルギリウスの役割と同じである。すなわち、死んだ恋人ゾフィーを中心人物に据えたノヴァーリスの小説『青い花』に導かれてムージルは同じ趣旨の小説『トンカ』を書き上げることができた。

1922年当時ムージルはプラハの新聞プラーガー・プレッセ紙にせっせと演劇批評を書き送りその原稿料により生活を支えていた。傍らにいる妻マルタも得意の人物スケッチを次から次へと描き同紙の編集室に送り、謝礼を得ていた。ムージルは毎晩のように劇場の最前列に座り、そしてその芝居の批評を仕立て、郵便でプラハへ送る。そうした日々の中で、今は亡き若き日の恋人に想い馳せ、古い草稿に手を入れ、完成稿に仕上げる。生活のために演劇批評を書きながら、その一方で若い日の思い出を振り返りつつ、その真正な感情を作品化すること。この二つが何ら矛盾することなく一人の人間の中で同居することを、我々は小説『トンカ』の成立事情から知ることができる。

注

Robert Musil: *Prosa und Stücke, kleine Prosa, Aphorismen, Autobiographisches, Essays und Reden, Kritik*. Herausgegeben von Adolf Frisé, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1978. (以下 PS と略記して、その後にページを記す)

1) PS, S. 279

2) Helmut Arntzen: *Musil Kommentar sämtlicher zu Lebzeiten erschienener Schriften außer dem Roman »Der Mann ohne Eigenschaften«*. München (Winkler Verl.) 1980, S. 134

3) Ebd.

4) PS, S. 279. 邦訳は、川村二郎訳『三人の女』、松籟社ムージル著作集第7巻「小説集」322頁

5) PS, S. 281. 『三人の女』322頁

6) Novalis: *Das dichterische Werk, Tagebücher und Briefe. Band I*. Herausgegeben von Richard Samuel. München, Wien (Karl Hanser Verl.) 1978, S. 431-492 (以下、ノヴァーリスからの引用はこの版を用いる)

7) Novalis: *Schriften. Tagebücher, Briefwechsel, Zeitgenössische Zeugnisse. Vierter Band*. Herausgegeben von Richard Samuel. Stuttgart (Kohlhammer Verl) 1975, S. 1-60

8) Novalis, S. 491

9) Novalis, S. 456

10) 沖積社『ノヴァーリス全集』(3巻)「解題・注」409頁

11) Robert Musil: *Tagebücher*. Hrsg. v. Adolf Frisé, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1983. S. 147. (以下、Tb と略記。その後にページを記す)

12) Ebd. 「ノヴァーリスの文が思い出される」で始まるムージルのここでの引用はリカルダ・フーフからの不正確な引用である。Vgl. Tb. II, 81. その他、同じく1905年4月20日の記述でノヴァーリスとゲーテの『ウェルテル』との影響関係についても、正しくは『ウェルテル』ではなく、ノヴァーリスは『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』から強い影響を受けた。Vgl. Tb. I, S. 143 ならびに関連の注。

13) ムシル『特性のない男、三人の女』(世界文学全集 II-23) 河出書房, 昭和39年, 506頁

14) Vgl. Karl Corino: *Leben und Werk in Bildern und Texten*. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1988. S. 112. コリーノはこの草稿の写真を載せている。

15) Novalis, S. 456

16) 『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』(中) 山崎章甫訳, 岩波文庫, 2000年, 13頁